

書 評

澤江史子. 『現代トルコの民主政治とイスラーム』 ナカニシヤ出版, 2005年, vi+344p.

松永泰行\*

本書は、著者の博士論文「現代トルコにおける民主政治とイスラーム政党—ムスリム社会の政教関係をめぐる一考察—」（一橋大学大学院社会学研究科, 2005年）に、より最近の時期を扱った2章（第7章, 第8章）を加えることで構成されている。原題がよりよく示しているとおり、主題は、1970年にネジメッティン・エルバカンが結成した国民秩序党から現在のタイプ・エルドアンが党首の公正と発展党（2001年～）に至る一連の「イスラーム政党の台頭とそれに伴う世俗主義体制との相克の過程」の分析である。研究書としての本書の実質的な部分は、1923年のトルコ共和国成立後に構築された世俗主義体制, 1945年の複数政党制導入後の体制の変化の分析, さらに1960年代末までの時期における現象としてのイスラーム復興の形成要因を論じた第1章, 国民秩序党, 国民救済党の活動とイデオロギー（「ミッリー・ギョリュシュ」）を論じた第2章, 1980年クーデター後の軍事政権によるイスラーム政策導入後の世俗主義とイスラームの関係を論じた第3章, オザル政権の経済政策および「公正な体制」論を採用した福祉党内の変化

を論じた第4章, 福祉党連立政権（1996～1997年）の政策を扱った第5章, そして福祉党政権を崩壊へと導いた軍部主導の「2月28日キャンペーン」（1997年）とそのインパクトを扱った第6章から構成されている。これらの章については叙述もストーリーで読みやすく、既存研究を参照しながら、自らの現地調査およびトルコ語の一次文献に基づく豊富な情報を整理した実証研究として、高く評価したい。とりわけ、国民秩序党以来の一連の政党が、ダイナミックな環境に適応し変化を遂げてきた過程とその背景を、多角的に明らかにし、提示している点は、本書の最大の長所と思われる。

これらに加え著者は、枠組的議論として、イスラームと政治と題された序章において、イスラーム復興運動の概念、西洋近代的政教関係論とイスラームとの関係、イスラーム国家論の問題性などを論じ、また、イスラーム復興系労働団体、経済団体、人権団体という興味深い主題を扱った第7章においても、その序論部分で、市民社会論とイスラーム、イスラーム復興運動の自立性と公共志向について論じている。最後に、2002年末から政権を担っている公正と発展党の政策と戦略を論じた第8章は、多面的な取り扱いで、情報量も豊富である。

以下、気鋭の現代トルコ研究者が発表した重要な業績としての本書の価値を十分に認めたい。日本におけるトルコを含めた現代中東およびイスラーム地域における宗教復興現象／運動研究および比較政治研究の今後のさらなる発展のための建設的議論の契機なる

\* 同志社大学一神教学際研究センター

ことを期待しながら、(一部、細かな点をも含むが)本書の一部の叙述あるいは議論について、評者が感じたいくつかの疑問点について、簡単に触れてみたい。

まず序論において、著者は、小杉泰の「思想の市場のメカニズム」の説明法を引きながら、シャリーアは可変的であると断言している(p.20)。評者の読み方の誤りかもしれないが、この点は、シャリーアの成立過程の性格から、その内容が(一般に)可変的であるとの結論を導き出したものであるように見受けられた。一旦確立されたシャリーアの内容は、イスラーム法学的には、無効にできない永遠に真なる神の命令であるとして取り扱われることが一般的だと思われるが、これは単に言説レベル上のことであろうか。

著者は第1章において、イデオロギー的な世俗主義(「近代化=西洋化=世俗化」という「ドグマ」)を社会に強いているトルコの体制が「国家主義的で(中略)民主主義を制限することも厭わない権威主義的な体制」であると説明している(p.43)。この説明は適切なものであると思われるが、その一方で、全体を通じて、国家概念があまり使われておらず、しばしば体制という用語がそれに取って代わっているように思われた点が気になった(たとえば、「世俗主義体制とイスラーム復興勢力の摩擦」(p.36)、「体制の強権的政治手法」(p.64)など)。比較政治学では、体制は、政治システム全体を根幹的な意味で特徴づけるための概念として専ら用い、強制力を伴う行動主体としての国家とは区別して用いることが多い。

著者は、アイケルマンらの「ムスリム政治」という概念を修正して、「トルコ・ナショナリズムとイスラームのシンボルの意味づけと、社会の価値規範を定義し分節化する制度の支配をめぐる競争と闘争」としての「トルコのムスリム政治」(p.64)なるものを提示している。上述の体制概念による国家概念の代替/包摂の問題とも重なるが、そのような枠組みは、水平/真空的な言説空間における「闘い」(「自身の正当性と相手の不当さを主張する言説上の闘いへの傾斜」(p.63)など)を想像させがちであるとすれば、権力の不均等的分散に基づくヒエラルキー的關係(権力関係)の存在をばやけさせるデメリットをもつように思われた。また、評者はトルコ政治の研究者ではないので誤解しているかもしれないが、全ての政治的主体がそのような「ムスリム政治」を実践することを余儀なくされるわけではないとすれば(門外漢としては、むしろ、国家イデオロギーとしての世俗主義/アタテュルク主義への整合性を意識することを全ての政治的主体が余儀なくされているのではないかと想像してしまうが)、国家権力による選択的な抱き込み・線引き・排除の実践をも、(水平的な)「ムスリム政治」と(やや不適的に)よび直す結果になっているようにも思われた。

第2章において筆者は、国民秩序党の綱領としての「ミッリー・ギョリュシュ」(MG)を「ムスリム共同体の視座」を意味すると(やや一面的に)提示する一方で(p.76)、同党は「政治ヴィジョンをイスラーム的用語やレファレンスを用いて公に示す

こと」を怠ったと (p.81), 否定的に解釈している。研究者によっては, MG を, ミッリー (milli) という言葉の二重の (宗教的およびネーション・ステイトに基づくナショナリズム的) 意味合いを巧みに使った「ダブル・トーク」として (それによる落とし穴を含みながらも, その時代の政治的環境の下での可能性を限界まで活用したものと) ポジティブに評価する場合もあると思うが, どうかであろうか。この点は, 国民救済党はプログラム政党ではなかったが, 「世俗主義体制に対してイスラーム擁護の観点から鋭く対立する「反体制政党」であった」(pp.90-91) という著者の評価にもかかわってくると思われる。直感的には, プログラム政党でなく, 「4年間の間に三度も連立政権に参加」した政党を, 反体制政党とよぶことは, (サルトーリの意味合いにおいても) やや躊躇われる。ダブル・トークの意図を加味するならば, 同党を世俗主義体制に対して鋭く対立し, 世俗主義体制の原理原則を批判する立場の政党と断定するのは, やや早急のようにも感じられるが, 実際にはどうであったのであろうか。

最後に, もう一点。著者は, 自らの研究対象を比較的な視座においてより適切に提示する努力の一環として, 本書の主題でもある「イスラーム政党」を「イスラーム的な規範に依拠しながら, また, イスラーム的理念に合致する社会の実現を目指して, 体制を整え, 処方箋として具体的な政策を実施していく」政党と, ゆるやかに定義している。それは全く問題ないが, その一方で, 国民秩序党以来の一連のイスラーム政党を, 「政治的

(な) イスラーム復興運動」であると説明している (p.4, 9)。著者はさらに, トルコにおいてイスラーム主義とは (政治的イスラームや反動主義と同様) 外から貼られたレッテルであり, トルコのイスラーム政党の幹部らの「イスラーム復興を目指して政治的領域で活動する勢力」という自らのアイデンティティとは異なると説明する一方で (p.262), 現代トルコ (およびいくつかの類似の他国における) のイスラーム復興運動を理解・説明するためには, 狭義のイスラーム主義 (運動) の概念を拡大したイスラーム復興運動 / 勢力観が必要であると論じている (pp.36, 261-264)。

そのような粹組的な議論は, 一国研究としても, 比較研究の視座からも, 大変重要なものであり, 終章ではなく序論においてじっくりと議論して欲しかった。以下, 議論喚起のための建設的な批判の意図の下で, 敢えて異論を述べるならば, 評者は, 現象としてのイスラーム復興を一般に多次元的・多領域的な現象としてゆるやかに理解するのは別に, 復興主義的であれ非復興主義的であれ, イスラーム政治運動は, 同じレベルで概念規定せずに, より限定的な分析概念として用いることが有効であると思う。言い換えると, 分析概念としてのイスラーム復興主義運動は, 同じイスラーム政治運動のレベルで他の非復興主義のイスラーム政治運動 (たとえば, 伝統主義, モダニスト / 改良的 / 改革主義のイスラーム政治運動など) と, さらにイスラーム以外のイデオロギー的政治運動と, 区別して概念化 / 使用することで, 有効性を生み出し

うるものとする。この立場からすると、著者のように、政治的なイスラーム復興運動／復興勢力を、現象としてのイスラーム復興と同様にゆるやかな規定で概念化すること（たとえば、何を復興するかも正当に議論の対象となるとの理解（p.30）を参照）は、（少なくとも分析的説明が主目的である研究書においては）あまり薦められるアプローチではないように思われる。加えて、著者の説明を読む限り（再びトルコ政治に門外漢の一読者に戻るが）、国民秩序党以来の一連のトルコのイスラーム政党は、他国の文脈におけるモダニスト的なイスラーム改革主義の傾向／潮流との相似性が強い気がして、仕方がない。

これらの問題は、単に概念的枠組みにかかわる問題だけでなく、多元的現象としてのイスラーム復興と研究対象であるイスラーム政党の関係についての理解・説明にも関係してくると思われる。著者は、後者が前者を「追い風として台頭し、その復興のあり方に大きく影響されている」（pp.97-98）と説明している（p.263も参照）。全体として、そのような議論はもちろん成り立つと思うが、エルバカンが率いた福祉党が1980年代後半以降、ナクシュバンディー系のタリーカなどからの独立性を強調するに至った動きなどにみられる両者の間の競合的側面をどう評価するかなど、細かな点の分析にも全体的枠組みは影響を与えることになると考えられる。また、福祉党と美德党・公正と発展党の間、あるいは福祉党・美德党と公正と発展党の間の違いについて、著者はその全てを一連の政治的イスラーム復興運動の政党として議論している

が、支持者の中核が敬虔なムスリムで「公正というイスラーム的政治規範」の実現を掲げているとしても、公正と発展党を政治的イスラーム復興運動と論じることは、少なくとも比較分析的視点からは、かなり苦しいと思われるが、どうであろうか。

最後に繰り返しになるが、以上の細かな苦言は、その適否にかかわらず、本書が、国民救済党以来の一連のトルコの親イスラーム／イスラーム擁護派政党の研究として優れた業績であることを、否定するものでは全くない。単に、同書が（トルコ）一国研究を超えた領域においていかなる説得力をもつかをめぐって、若干の重要性をもつ可能性があるものに過ぎない。

島田周平.『アフリカ 可能性を生きる 農民』京都大学学術出版会、2007年、270 p.

池上甲一\*

## 1. 本書のタイトルと課題をめぐって

何とも魅力的なタイトルである。そこには周辺環境に翻弄される受け身の農民像ではなく、主体的な意思をもってたたかき生きる農民像が含意されているからだ。だが、可能性を生きるということは一方で、余裕のなさや脆弱性をも表象していることに注意が必要である。可能性は実現されるかもしれないが、実現できないかもしれない。雨は飢えを

\* 近畿大学農学部

癒す恵みともなれば、逆に洪水を引き起こす災いとなるかもしれない。アフリカの農民社会において、うまくいくこととうまくいかないこととは紙一重の差でしかない。今年うまくいったからといって、同じ方法が次の年もうまくいく保証はない。

多くの事柄が不確実性の下にある。可能性を生きるというタイトルには、この不確実性を前提として、成功も失敗も同じ「可能性の束」として受け止め生きていくアフリカ農民の逞しさが反映されているように思う。そうであるからこそ、アフリカ農民は資源へのアクセス・チャンネルを絶えず、必死に探し求め、リスクを減らし、確実性を増大させるように戦略を立てて行動する。つまり、「可能性を生きる」ことは積極性と脆弱性という二面性をもっているのである。

成功と失敗があざなえる縄のように織りなしている世界では、失敗から不死鳥のように回復してくる強いアフリカ像と、その成功が長続きしない悲惨なアフリカ像とは同じコインの裏表に過ぎない。著者も指摘するように、アフリカについて語る時、マクロ指標からの悲観的な見方とミクロの調査に立脚する明るい言説に分解するきらいがある。しかし実際の農村は、地域差をもちつつもその両極端の間に位置している。

だから、多様なアフリカの農業と農民が存在している現実を理解するためには、「遅れた」アフリカと「豊かな」アフリカというなかなか交差しえないアフリカ像を架橋するためのフレームワークが必要となる。本書の課題は、多様な顔をもつアフリカの農業と農民を

統一的に理解するための視角を提供することであるが、それはミクロとマクロの乖離を埋める方法論の構築をも意味している。すなわち、本書ではナイジェリアのE村とザンビアのC村という2つの社会を取り上げ、その調査結果をより広い時間的、空間的広がりの中に位置づけ直すことによって異なった時期・地域における農民の行動様式にみられる共通性を導き出そうとする。

この作業は、他の地域や中央政府との関係などの空間的な広がり、政策の展開過程、村の形成史、個人や家族のライフヒストリーといった時間的な広がりをもつ開放系の中にミクロの研究成果を解き放つ地域間比較研究の方法論的試みでもある。このような方法論は未だ確立されておらず、著者の問題意識に沿うような形でのミクロな研究もまだまだ蓄積が不十分である。現に生きている農民と農村を閉鎖系の中で捉えることは基本的に無理がある。この意味で、新しい方法論の提示は非常に大きな意味をもつといえよう。

## 2. 本書の内容

本書は大きく3つの部分に分けることができる。ひとつは方法論的検討（第I章、第II章）、2つ目はナイジェリア農村の分析（第III章～第VII章）、3つ目はザンビア農村の分析（第VIII章～第XI章）であり、第XII章は結論にあてられている。

方法論的検討の部分では、分析視点としてのポリティカル・エコロジー論の援用が計られる。アフリカの農業を考えるうえで権利と財産は重要なキー概念である。そのうちの権

利については、所有権・用益権・請求権という権利概念ではなく、休みのない働きかけが資源へのアクセスを説明できるとし、もうひとつの財産については有形財産からアクセス・チャンネルへと理解の深化がみられたとする。この過程で、ポリティカル・エコロジーの脆弱性概念や不確実性論が重要な役割を果たした。ここには、市場を想定する新古典派経済学の適用限界が示唆されており、「市場経済的に発展しないアフリカ」を理解する鍵が隠されているように思う。

ナイジェリア農村およびザンビア農村の分析についてはその相違と共通性、変化の方向を整理した対照表を参照してもらうことにして、興味深かった点のみ紹介したい。

ナイジェリアについては、オイルブームとオイルドゥーム（不況）が周辺地帯であるE村の労働力移動と農業形態ならびに就業形態に大きな影響を及ぼした。この村はもともとココア・ベルト北辺地帯への労働力供給地帯であったが、オイルブームの到来とともに農

民層の空間的移動と社会的移動が拡大し、オイルドゥームによってとくに高学歴層の村内滞留が顕著となった。若年労働力の流出は食料生産に悪影響を及ぼすにもかかわらず、それが許されたのはキャッサバ栽培を拡大し、他方で季節的な重労働は雇用労働者に依存するようになったからである。村内に滞留する高学歴失業者は「意欲的な農民であったわけではなく」（130頁）、政治活動を含む広義の求職活動に励んでいる。

ザンビアについては、白人の植民地経営、ローデシア・ニヤサランド連邦の経済政策による影響が農業構造や労働力移動に色濃く刻印されている。市場アクセスのよいC村はそうした影響を強く受けた移住者からなる村である。この村を特徴づけるのはダンボを利用した集約的な野菜生産である。ダンボの経済的価値が上昇するほど、その利用と配分をめぐる争いが激化する。移住者がダンボを含む土地へのアクセスを安定化するためには家族の結束と絶えざるローカル政治へのコミッ

表1 ナイジェリアとザンビアの相違と共通性および調査村の変化

	歴史的な相違	政治経済的類似点	事例調査地		
			立地条件	主要な変化	
ナイジェリア	小農生産、内戦、開発計画の失敗、換金輸出作物偏重政策	・ 鉱産物依存モノカルチャー ・ 中所得国→低所得国 ・ 債務→構造調整	経済的周辺部	オイルブーム→高速道路、製鉄所→日雇い労働者→州都の発展→就業機会増大	構造調整→都市就業機会の縮小→若年高学歴者の農村滞留→政治活動への期待
ザンビア	白人入植、1党独裁、補助金制度が機能、食料作物管理政策	・ 政治の民主化と農民による政治活動へのエネルギー投入 ・ 民政移管(ナイジェリア) ・ 複数政党制(ザンビア)	経済的中心部 市場アクセスの良さ	白人入植→強制的移住 良い市場アクセス→ダンボ耕作の急拡大	国際開発 NGO →新しい小規模灌漑、農業集約化

トメントが要求される。だがそれも、「過剰な死」(214頁)という不条理な突発事には無力となる。他方、土地を取り上げる側の村長職とて安全ではなく、不確実な地位を守るための戦いが必要となる。

本書の結論にあたる第XII章では、アクセス・チャンネルを拡大するための積極的な働きかけ、そこから生まれる空間的・社会的な流動性の高さや多生業・多就業という暮らし方、農業の相対化、外見上の変わり身の早さとは裏腹の変わらない基層部分の保持、といった諸点が2つの村の農民に共通する特質として指摘されている。とりわけ、「積極的に変貌しているようにみえて他方でまったく変わらない基層部分を保持しているという2面性」、つまり「変化に対して見せる2つの姿、積極性と抵抗性との併存こそが、…農民が「可能性を生きること」の内容だと結論づけている(248~249頁)。

### 3. 若干の論点

それでは最後に、紙幅の許す範囲で若干の論点を提示したい。

第1に、「マクロとミクロな視点の間にみられる乖離の問題」(243頁)をどう解くかという方法論についてである。開放系の中で地域間比較研究をするという方法は、ミクロを通じてマクロ状況を描き出す可能性を示している。しかし逆に、ミクロな状況がマクロにどのような反作用を及ぼしているのか、あるいは及ぼしうるのかについての視角は本書においてもなお希薄である。この点で、マクロとミクロの視点を統合するパースペクティ

ブは、ポリティカル・エコロジーの枠組みを使ってもまだ道半ばだと言わざるを得ない。

第2に、アフリカ農民の行動原理を共通性として抜き出すという課題設定上、本書は個々の農民に焦点を合わせている。そのことは、日常的な言葉で農民のリアリティーを紡ぎ出すのに大いに貢献しているが、農民が保持している「まったく変わらない基層部分」(≡自給的食糧生産の固執)は個人を超えたレベルに目を向けないしと解明できないのではないか。個人レベルでは出稼ぎしながら、食糧自給を同時に確保することはできない。若者が都市に働きに行き、親や妻が土地のアクセス権を守りつつ食糧生産を行なうというような共同と役割分担が実際の姿だろう。とすれば、個人レベルの働きかけに加え、もう一段上の世帯ないし家族、場合によっては村レベルの生存戦略を分析枠組みに加え、それとの関連性を解明しなければならない。

とはいえ第3に、集団の共同性に対して過剰な思い入れをもつことには慎重であるべきだ。本書が示唆するように、共同は確固たるものではなく、常に変動する可能性をもっている。とりわけザンビアの例では、村の中で平準化機構が働き、相互扶助の下に暮らしているというアフリカのユートピアとは違う、生々しい争いの現実が描き出されている。アフリカの農村にも格差は厳として存在する。アフリカ社会の研究者にはこの事実を直視し、その意味するところを解明する姿勢が必要だろう。

第4に、アフリカ農民たちによるアクセス・チャンネルへの働きかけの結果として、

農業生産の相対化が進展するとすれば、その際の「農民」という用語にはどのような内容が盛り込まれているのかという疑問が発生する。相対化が農業生産からの完全撤退を意味するわけではないとしても、都市への移動の場合には一時的にせよ農業生産から完全に離れてしまう。たとえば、評者の調査地であるキリマンジャロ山腹にある村の高齢農民たちも、かなりの人たちが各地を転々とし、さまざまな職や暮らし方をしてきている。この流動性に満ちたライフストーリーは、本書の結論と重ね合わせるとうまく理解できる。ところがそれだけに、かえって彼らを農民と呼ぶのかという疑問がわく。つまり、流動性や変わり身の速さへの注目は「農民」概念の自明性に反省を迫るのである。

最後に、無い物ねだりの注文を2つだけ追加しておこう。ひとつは、著者自身もあと

がきで述べているように、ポリティカル・エコロジー論を援用しながら、エコロジーについての論及がほとんど行なわれていないことである。生態や環境についてもさまざまな葛藤と語られ方があるはずで、次の著作ではこの部分の充実を期待したい。

もうひとつは個人に焦点を合わせているのに、女性が主役としてはほとんど登場してこないということである。配偶者が亡くなれば、子どもを連れて実家に帰ることを余儀なくされるとすれば、日常的に実家との関係を強化する戦略行動が行なわれているのはいか。男性農民だけでなく、女性農民もさまざまなアクセス・チャンネルに働きかけているのではないか。しかしその行動原理や働きかけ先は男性農民と異なっているのではないか。これらの疑問にも答えて欲しいところである。